

まちづくりと市民のキャリアデザイン(3) : 市民コ レクション展が市民のキャリア形成に与えた影響

著者	金山 喜昭
出版者	法政大学キャリアデザイン学部
雑誌名	法政大学キャリアデザイン学部紀要
巻	5
ページ	201-225
発行年	2008-03
URL	http://hdl.handle.net/10114/6477

まちづくりと市民のキャリアデザイン(3)

—市民コレクション展が市民のキャリア形成に与えた影響—

法政大学キャリアデザイン学部教授 金 山 喜 昭

はじめに

野田市郷土博物館は2007年4月1日からこれまでの野田市が直営で運営する方式から、指定管理者としてNPO法人野田文化広場が全面的に運営を開始した。新しい運営形態にあわせて、博物館の理念についても「市民のキャリアデザインの拠点」とし、その実現のために新しい事業を手がけるようになった。その最初のものが、今回取り上げる市民コレクション展である。博物館では企画展を年3回、特別展を1回開催するが、市民コレクションは企画展の一つとして毎年開催を予定している⁽¹⁾。

市民コレクション展は、様々な市民コレクター（収集家）の参加により、コレクションとしての資料を公開するだけでなく、その人の生き方にも着目する。コレクターをキャリアの視点から紹介することにより、その人の生き方を学ぶだけでなく、そこから得られる考え方や価値観などを市民のキャリア形成に反映化させていくことを目指す。

本稿の目的は、この市民コレクション展が市民としてのキャリア形成にどのような影響や効果を与えたのかを検証し、あわせて今後の課題などを提示することにある。なお、ここで対象とする「市民」とは、まずは来館者をいう。次にコレクターとして本展に出品した市民であり、ここでは土人形コレクターの高梨東道^{はるみち}氏をさす。さらに本展を担当した学芸員を含む。学芸員は当館に勤務し市内に居住する。つまり3者を市民として捉えて、それぞれの市民にとって本展がキャリア形成の上から、どのような影響や効果を及ぼしたのかを検討する。

その方法は、来館者についてはアンケート調査、コレクターと学芸員はヒアリング調査による。アンケート調査の集計はクロス・チェックを用いて検討する。

1. 市民コレクション展の先行事例

本展について説明する前に、まず先行的な事例となる同類の主な展覧会について触れることにより、本展の企画の位置づけを確認しておきたい。

栗東町歴史民俗博物館（1992～現在）

当初はマイ・コレクション展として、住民の思い出の品や家宝などを展示して、貴重な文化遺産を受け継ぎ育む心を育てることを目的にして開始された。開始10年後からは毎年1回、マイ・ミュージアム展として、市民のコレクションだけでなく創作作品も出品している。例えば、2004年6月に開催した第3回展では、5人の市民がそれぞれ菓子の木型、茶道具、思い出の色紙、フランス車のミニカー、画伯からの年賀状、創作ちぎり絵、絵画教室の作品などを出品した。コレクションはいずれも数点から数十点単位の小規模なものであるが、展示品にはそれぞれの市民が品物にまつわる思い出が書き記されており⁽²⁾、コレクションを通じて自分史を公開する。

岐阜県博物館のマイミュージアムギャラリー（1995年～現在）

岐阜県博物館では1995年にマイミュージアムを新設し、専用のギャラリーでは市民自身の企画によるコレクション、研究発表、創作作品の公開を毎年10回程度定期的に実施している。ここは、「県民の主体的な収集、所蔵品の公開展示及び生涯学習の場とすると共に、県民相互が多様な文化情報の発信・授受を行う等多目的な活用を図ることを目的としている」⁽³⁾。2007年度は「華麗で多彩な犬山焼徳利・盃展」という一市民の犬山焼きコレクション展、「城下町妻木～その歴史と文化～」では郷土史研究会の人たちが神社に奉納された歴史資料などを通して妻木の歴史を紹介する。なお企画から実施までの全ての工程は企画した市民によるもので、会期中には講演会、実演会、ギャラリートークなども市民が実施する。

釧路市立博物館「私の博物館展」(1998年7月～現在)

市民に博物館がより親しまれることを目的に企画したという。1998年7月から現在まで特別展として毎年定期的に開催している。高価な品物であることはなく、市民それぞれの思いが込められたコレクションを対象とする。最初は市民の日常生活道具や子どもの時の思い出の品々を展示した。2回目は5人の市民から提供された1950年代から70年代に生産された国産オートバイ展、3回目は元市役所職員による世界中の貝類コレクション展。最近では個人で40年間で集めたハンカチのコレクション(2006年)、化石コレクション(2007年)、ミニカーのトミカのコレクション(2007年)などが出品されている⁽⁴⁾。

野田市郷土博物館「私のコレクション展」(1998年8月)

私が学芸員時代に企画したものである⁽⁵⁾。市民が日常生活の中で楽しみながら地道に収集してきたコレクションに焦点をあてた。当時は「お宝」と称して個人コレクションが貨幣価値に換算されることが横行していたことから、同じ個人コレクションでも値段のつくことのないようなコレクションに着目して、コレクションを通じて貨幣価値とは異なり、コレクションが有する人生の中での意味づけを確認するために企画した。市の広報紙などで公募したところ、子どもの頃からラジオ製作やアマチュア無線をしていた人の真空管コレクション、類似のコレクターがいないことからはじめたという牛乳瓶の蓋コレクションや、そのほかにも映画パンフレット、だるま、ベーゴマ、日本酒の王冠、タバコのパッケージなどのコレクションもあった。出品してくれた市民にとって、それらは、何となく集めたり、好きで集めてきた、人がやらないこと、記念として集めてきた、というものであった。

茨城県自然博物館「市民コレクション展」(2001年2月～現在)

中川志郎氏は同館の館長当時に同展を開始するにあたり、市民コレクション展は博物館のコレクションを増やすひとつの方策であるという認識を示している⁽⁶⁾。博物館が収蔵する資料とは別に、市民から提供されたコレクションについて、その種類や所蔵者などの資料情報を登録して博物館資料にするというものである。展覧会後に現物を提供者に返却しても資料情報を登録しておけば、

それは収蔵資料と同等の博物館資料とみなされる。よって同館の公募規則は博物館が必要とする種類のコレクションを対象とし、学術的に必要な情報が備わっていることを要件としている。

第1回目は「チョウの魅力を求めて」という、アマチュア採集家や市民の昆虫研究者たちのコレクションや研究成果などを紹介した。さらに「とって、集めて、整理して—いつしか「石」に魅せられて—」（2003年）では市民が様々な機会に集めた石を紹介した。ここでは、市民コレクションだけでなく宮沢賢治にゆかりの石、登山家の植村直己がエベレスト山頂から持ち帰った石や、鉱物採集のマナーなども合わせるなど興味を引く展示にするなどの工夫も凝らされている。そのほかに化石のコレクションを公開する「化石掘りの魅力」（2004年）、魚拓・剥製のコレクションや魚拓製作の体験コーナーを設置した「釣った魚に魅せられて」（2006年）、バードカービングのコレクションを公開した「自然を創る—バードカービングの魅力—」（2007年）なども実施された⁽⁷⁾。

以上の市民コレクションには、いくつかのモチーフ上の違いがある。栗東町歴史民俗博物館のように初期の事例は、博物館を市民にとって身近なものにすることから出発している。釧路市立博物館もそうであるが、他に新潟県立歴史博物館の「マイ・コレクションワールド展」もやはり同様のものである。岐阜県博物館のマイミュージアムでは当初からコレクション以外にも研究成果や創作作品なども対象とし、市民の自主性を踏まえた運営手法を採用しているが、これもやはり博物館を市民に身近な存在にするためといえよう。栗東町歴史民俗博物館も2002年にマイ・ミュージアム展と変更してから、出品する市民自身が準備作業などを担当し「市民学芸員」として活動するようになっている。次は、野田市郷土博物館の「私のコレクション展」のように、貨幣価値によらないモノの価値の見直しをはかろうとしたものである。最後は、茨城県自然博物館の事例のように、新たに博物館のコレクションづくりの手段とするものである。他に群馬県立自然史博物館の「私が掘り出した自然の宝もの展」(1998年)⁽⁸⁾も同じ事例であろう。博物館は資料に関する情報や所蔵者を登録することができ、将来的には所蔵者から資料の寄贈や寄託を期待することができるだろう。なお、第二・三番目の場合でも副次的なモチーフとして、これまでの博物館を

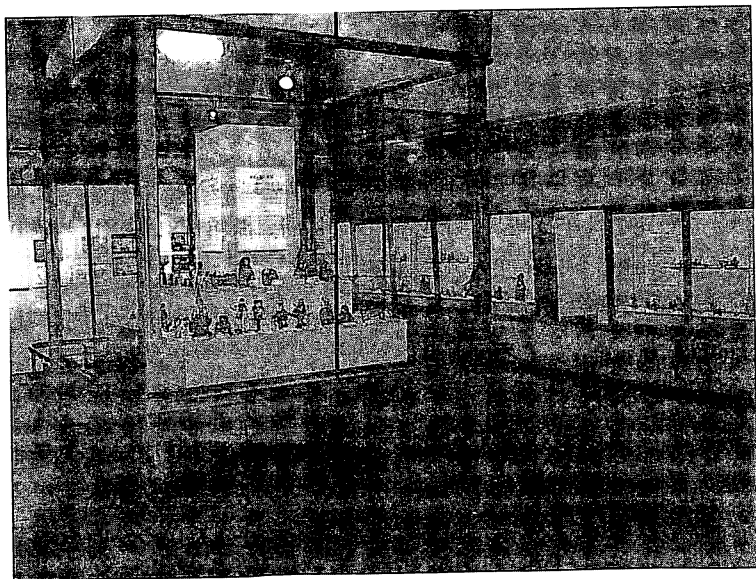
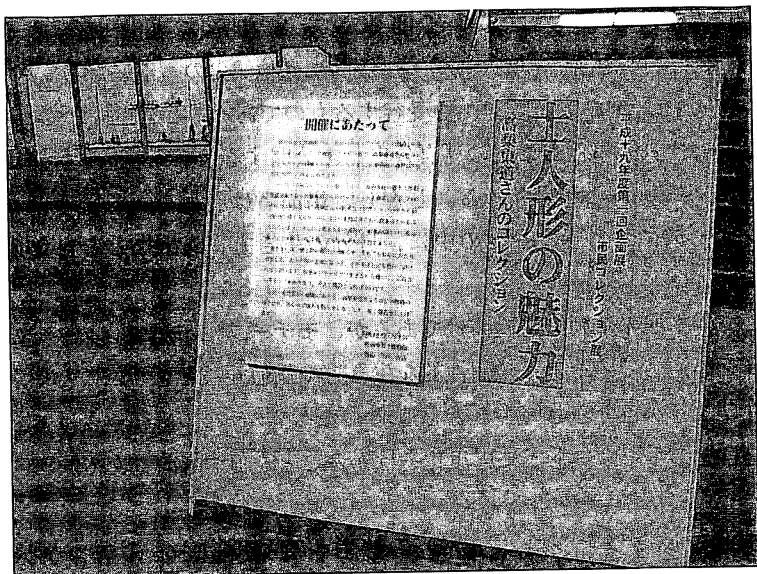


写真1,2 市民コレクション展の会場の様子

市民のより身近な存在にすることにも配慮していることから、最初のモチーフはいずれのタイプとも複合化する。

博物館で市民のコレクションを公開することについて、丸山昭彦は、それは市民の「自分史」を語るものであり、広義的には地域史の一部にもなるもので、それは博物館が市民の「自分史」を受容するものであることを指摘している⁽⁹⁾。先述したいずれの事例も市民の「自分史」を公開するという着想を事前にもち合わせていなかったと思われる。しかし、出品者は展示をみて、そのコレクションが形成される過程などの中に、自分の生き方や人生などを自覚したといってもよい。

そこで、本展の企画の位置づけであるが、モチーフは市民コレクターのコレクションを通じて、その人の個性的な生き方や価値観などを学ぶことや、市民ひとりひとりが自分らしい生き方を追求する上でプラスの影響を受けて、その成果を自己のキャリア形成に応用化をはかることを促すものである。

2. 市民コレクション展「土人形の魅力～高梨東道さんのコレクション～」の概要

本展は、市内在住の郷土人形収集鑑賞家である高梨東道^{はるみち}氏の土人形のコレクションを紹介すると共に、コレクターとしてのキャリアについても描き出す。展示品は、5000点以上にのぼる膨大なコレクションの中から選んだ約300点の土人形と、郷土人形の書物や収集仲間との交流にまつわる絵手紙などを展示した。2007年7月1日から9月24日の約3ヶ月間（開館日81日）にわたり開催したところ、来館者数は5742人（一日平均70.9人）であった（写真1,2）。

本企画の意図は、展示の鑑賞のみならず、土人形を長年にわたり収集した一人の人間の素顔を知り、その生き方にも触れることで、来館者自身のキャリアを振り返りかえる機会にすることである。

展示構成は、①日本の三大土人形、②産地別にみた全国の土人形（東北・関東・信越・東海・北陸・近畿・中国・四国・九州）、③張子人形、④想い出のコーナーの4つのコーナーに分類される。展示は、高梨氏の意向を踏まえて「土人形の美しさや愛らしさ」を広く紹介するという観点から、展示構成上の①～③を設営し、キャリア展示に関するものは④とその他の壁面に解説文や関連写真を展示した。キャリア展示の冒頭は、「土人形とともに歩いた人生」というタイトルで次のように紹介された。

高梨さんは10代で精密機械メーカーの工場勤務となった後、営業に配属、42年間会社員として過ごしました。土人形の収集と鑑賞は余技として行ったにすぎません。しかし収集が仕事を妨げたり、仕事が収集の障害となることはありませんでした。仕事と土人形収集はともに高梨さんの人生形成に深く影響してきたのです。工場勤務時代には自ら出向を志願し地方に滞在して、その土地の土人形を買い集めました。収集から得た産地名などの知識は、仕事上の会話を円滑に進めることにも役立ちました。

そのほかに、高梨氏の年表、自宅のコレクションルームの写真、収集家仲間との交友関係を示す写真なども壁面展示した。中には収集家仲間との交友関係については、異世代や様々な職業の人たちなど普段ではなかなか話せない人とも、同じ立場で話し理解しあう喜びがあることなど、それらがコレクター特有のコミュニケーションのあり方であることを紹介した。

また、思い出の土人形コーナーでは、6点の土人形を展示したが、それらは入手の経緯が特に印象深いものであり、高梨氏のキャリアにとって特別な価値や意味をもつものである。例えば、天草人形の山姥（明治後期～大正初期）の土人形は、地元の骨董商に頼んでも天草の人形は島外に出したくないといわれるぐらいに入手が難しかったが、再三再四、手紙で懇願したところ相手は根負けしたのか願い叶ってようやく入手したというものである。長野県中野市の、こたつ入り童子（奈良久雄作）は、土人形の産地の中野市を希望して転勤して、人形作家の奈良久雄さんの元に通いつめたが4ヶ月の勤務を終えて野田に帰る際に、奈良さんがそっと手渡してくれたもので、高梨氏だけが所蔵するオリジナルな人形であるという。

会期中、高梨氏は様々な形で本展の開催に協力をしてくれた。展示については学芸員が作成した企画案に対して、事前に自らの案を用意していたので、学芸員との調整によって展示構成を作成した。また資料の搬入・搬出や展示品のレイアウトなど、その準備から展示設営や撤収までの工程も学芸員との共同作業となった。会期中は会場に常駐し、来館者に対して解説や案内などを自発的に担ってくれた。本展は、このように学芸員による企画や運営という一般的な

展覧会のパターンとは異なり、出品者との共同作業で進めたことも特徴である。

また、会期中には次のような関連事業を実施した。まず開催初日には、オープニングのレセプションを実施した。直営方式で当館を運営していた2007年3月以前には実施することはなかった。主催者のNPO法人から副理事長、来賓として市の教育長の挨拶に続き、高梨氏にも挨拶をしていただいた。レセプションには多くの市民が集まり、高梨氏の挨拶には大きな拍手が寄せられた。会期中にはギャラリートークを3回（8月4・18日、9月1日）実施した。高梨氏と学芸員が対話形式で進行させるもので、高梨氏により個々の土人形の特徴、面白み、魅力や思い出などが語られた。またミュージアムコンサート（9月24日）として、市内の中央小学校の合唱部児童たちによる舞踊や合唱が行われたり、寺子屋講座という市民講座では高梨氏による「土人形の魅力～私のコレクションから～」（7月15日）という講演会も行われた。

3. 市民のキャリア形式におよぼした影響

次に、本展が市民のキャリア形式にどのような効果や影響があったのかについてみてゆきたい。対象者は、来館者、出品者であるコレクター、学芸員である。

（1）来館者の場合

会期中の来館者は5742人であったが、そのうち467人からアンケートを回収することができた（回収率8%）。男女別では約半数ずつであり、年齢分布は60才代が最多で27%、次に50代で23%、40代と70代が10%ずつとなり、20代が9%、10代と30代が8%ずつである（図1）。40代以上の中老年層が全体の7割と中心であるが、10代から20代の若者層が約2割に及んだことは、これまでの当館の展覧会ではほとんどみられない新しい現象である。それには、私が法政大学などの学芸員課程の受講生に見学することを課題として出したことにもよると思われる。居住地は野田市内と市外の比率が56%と44%であるが、従来は約7割が市内在住者であったことに比べると、やはり大学生たちの来館が影響していると思われる。

職業別では主婦が最多で25%、次に学生と無職がそれぞれ14%、会社員

図1 企画展「土人形展」入館者（年齢別）

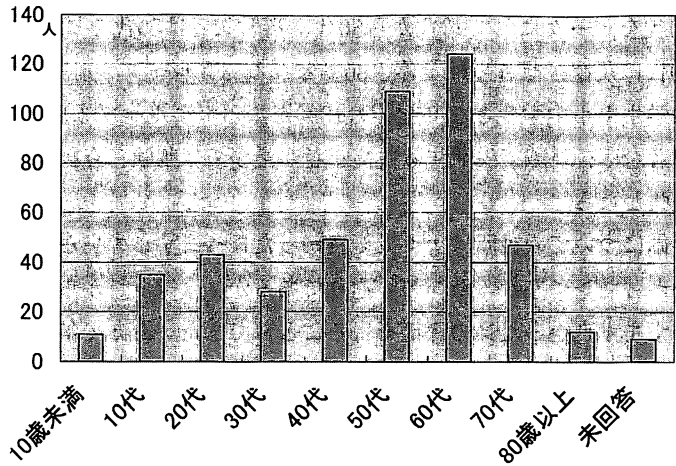
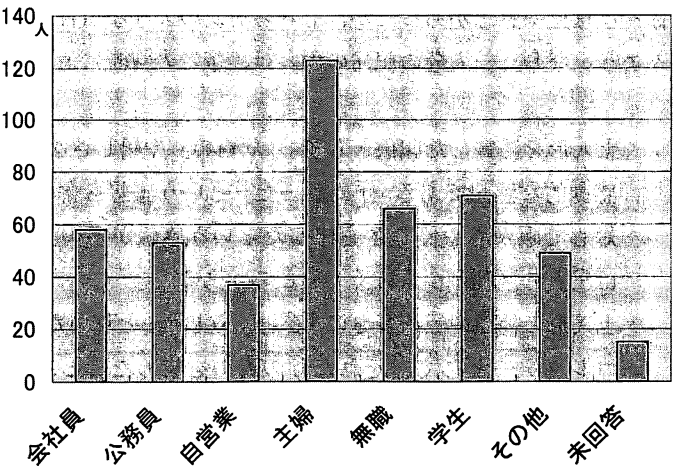


図2 企画展「土人形展」入館者（職業別）



12%と続く（図2）。このうち無職は60代以上のものが大半であることから、大多数は定年退職者をあらわしていると思われる。主婦層については、50代以上が大半であることから、全体の35%は60代以上の無職と50代以上の主婦となる。男性は定年後に地域で暮らす人たちであり、主婦の中の多くは夫の定年後に共に地域で生活する人たちであろう（以上をグループ1とする）。職業を

もつ人たち（有職者）では、会社員は50代をピークにして20代から60代、公務員は40代をピークにして20代から50代、自営業者は50代をピークにして20代から70代に及び、それらは全体の30%となる（グループ2）。また、若年者は主に大学生や小中学生となり全体の13%となる（グループ3）。つまり、今回の来館者層は、地域で生活する中高年者が最多で3割強、有職者が3割、学生が1割強となる。

展示評価についての設問は、＜大変良かった＞＜まずまず良かった＞＜あまり良くなかった＞＜悪かった＞の4通りであるが、ほぼ全員から＜大変良かった＞＜まずまず良かった＞の評価を得ることができた。あえて年齢別に両者間の分布をみると、50代以上は8:2の比率であり、30～40代は6:4、20代は7:3の3つに分類することができる。年齢層に応じて展示内容からうける印象に違いのあることが分かる。

アンケートでは展示の内容が良かった理由について自由に記述してもらったところ、様々な意見や感想があったが、それらを次のような項目に分類して傾向を見てみよう。なお、一人分の記述の内容は、筆者の判断により一項目に集約化した。

- ①楽しさ： 土人形を鑑賞した印象として、「面白い」や嬉しさなどを含む。
- ②感動： 感動的な感想である。「よかった」という感想も含む。土人形に対して暖かさや優しさを感じたという感想が多い。厳密に言えば①との区別がつきにくいところがある。
- ③驚き： 土人形の種類や数の多さに「びっくりした」と驚いた感想が多い。コレクターとして、それだけのものを集めたことに対する驚きなども含まれる。
- ④学習： 土人形の種類・色彩・産地などについて「参考になった」、「勉強になった」というように知識を得たことを自己評価する。
- ⑤発見： 未知のことを初めて知った喜びや感動である。
- ⑥懐古： 土人形を見て昔のことを懐かしく思い出すという懐古的な感想である。
- ⑦交流： 高梨氏から解説をうけたことが良かったという感想である。親切に対応してくれたことや、直接話を聞いたことに感動したこと

表1

	理 由									
職業	① 楽しさ	② 感動	③ 驚き	④ 学習	⑤ 発見	⑥ 懐古	⑦ 交流	⑧ キャリア	⑨ その他	合計
会社員	7	10	1	4	2	3	1	2	6	36
公務員	6	3		5	4			1	2	21
自営業者	6	5		2	1	1	3	2	1	21
主婦	21	16	5	8	8	5		7	6	76
無職	11	5	2	4	3	2	2	3	3	35
学生	15	9	2	15	4	1	3		7	56
その他	11	9	1	3	1	1	1	2	6	35
合計	77	57	11	41	23	13	10	17	31	280

表2

	理 由									
年代	① 楽しさ	② 感動	③ 驚き	④ 学習	⑤ 発見	⑥ 懐古	⑦ 交流	⑧ キャリア	⑨ その他	合計
10才未満	1	3							1	5
10代	5	5	1	8	3				4	26
20代	15	4	1	2	2		5	1	2	32
30代	8	1		1	1		1	1	2	15
40代	7	5		5	3	2		1	3	26
50代	14	19	3	7	7	3	2	4	8	67
60代	16	16	3	14	4	5	1	4	5	68
70代	9	2	2	3	3	2	1	6	3	31
80才以上	2	2	1						1	6
未記入				1		1			2	4
	77	57	11	41	23	13	10	17	31	280

なども含まれる。

⑧キャリア：コレクターとしての高梨氏の生き方やコレクションについて評価する意見や感想である。

⑨その他：博物館の運営面での意見や展示法についての感想など。

以上の集計を表1・2に示す。対象者は<理由>について記述をした280人である。最多は「楽しさ」であり次の「感動」とあわせると全体の5割に近い。一般的な展覧会でもこうした傾向があり、それに沿うものといえよう。次が「学習」で15%となる。これは年齢にはあまり関係なく子どもから高齢者に至るまで分布する。また「発見」は8%であるが、やはり若年者から高齢者まで分布する。なかでも50代から60代の主婦にピークがある。「懐古」は中高年者に分布することはうなずける。「交流」については、予想外に反応が少なく全項目のなかでは最小であった。

なお、ここで一番注目しておきたいことは「キャリア」についての感想である。それは6%というように決して高い割合ではないが、来館者から一定の反応があった。若年者から高齢者まで幅広い年齢層であるが、年齢層や有職者と無職者との間に反応に違いのあることが分かる。若年者では、「所蔵者の古人形への思いが伝わってきた」(20代学生)、「高梨さんの収集にかける想いについて、解説や展示から伝わってきたから」(20代会社員)というように、コレクターの収集にかける想いや熱意を評価している(傍線筆者による)。それに比べて年齢が上がると、主婦や無職の高齢者の感想は次のように、コレクターとして集めたことや、一人で保管管理している労苦などを賞賛している。

「大変丁寧に収集なさっていると思いました」(30代主婦)

「これだけの土人形を集められるのはご苦労様でした。昔からのものを大切に保存し受け続けて下さい」(50代主婦)

「すばらしく、こんなに集めたことに感心しました」(60代主婦)

「種類を沢山集められていて」(60代主婦)

「多数のそれも新旧あるものを集めたのに感服した」(70代無職)

「これほどの量の作品を集めた努力に敬意を表します」(70代無職)

「数量の多いこと。またきちんと整理されていること」(70代主婦)

これに対して、有職者の感想は、「何事も収集するというのは大変だと思いつつ生きがいとしてうらやましく思います」(40代会社員)、「高梨さんの収集への努力の並々ならぬものを感じさせる展示でした」(50代公務員)、「個人のコレクションとして、これほど打ち込めた事のすごさ」(50代自営業)、「高梨さんの生き方に共感しました」(60代男性会社員)というように、コレクターとしての高梨氏の生き方やその姿勢を評価している。

また、来館者のアンケート調査から、来館者グループごとの傾向をみると、次のようになる。グループ1の来館者は、50代以上の主婦と60代以上の定年退職をしたと思われる高齢者からなり、日常的に地域で生活する人たちをさす。そうした人たちと、グループ2の会社員・公務員・自営業者などの職業をもつ人たちとの間には各項目の数値上に大きな相違はみられなかった。グループ3の来館者は小中学生と大学生からなるが、グループ1・2との違いとしては、展覧会が土人形に関する知識を得ることに役立ったという反応が高かった一

方、キャリアに関する反応は低いものであった。

本展の成果としては、先述したようにグループ1・2の人たちの中で、少数ではあるが一定数の人たちにコレクターの生き方を普及することができたことと、それが好意的に受容されたことが分かる。それには高梨氏が展示室で来館者に気さくに声をかけて対応したことも要因の一つであろう。また、企画展の趣旨としてキャリアを位置づけたことや、展示構成についてもこれまでの市民コレクション展と異なり、コレクターのキャリアに関する展示を入れ込んだことが、来館者に対してコレクターの生き方の理解を促すことにつながったとみられる。

(2) コレクター高梨東道氏の場合

コレクターの高梨氏は、本展の開催について学芸員と共同して準備作業をし、会期中は会場に常駐して来館者に対応した。そのような経験は高梨氏のキャリア形成にどのような影響を与えたのだろうか。

高梨氏はコレクターとして34年間にわたり、自分の小遣いの範囲内で地道にコレクションを始めて、それが5000点に達するほどの土人形コレクションを保有する。それは高梨氏のキャリアの一部ともなっている。例えば長野県中野市に転勤を希望して、産地の土人形の作家との交流をしたことがある。そこでは収集した土人形のなかには、ご子息の誕生を祝って購入したものや、作家との友情関係によって贈呈された記念品もある。そうした経験は高梨氏のキャリアの財産にもなっている。また、コレクター同士の交流は、日常生活では知りあう機会のない人たちとの知遇を得ることもできた。そこにもコレクターならではのキャリアがある。同好の人たちとの交流によって形づくられたコレクションは、コレクター自身の好みや価値観を表すとともに、自らのキャリアを反映したものだといえる。

コレクターには少なくとも2つのタイプがある。ひとつは自分自身の趣味として愛玩のために好みのものを集める人たちである。なかには「人に見せると手垢がつく」といって、隠匿するようにコレクター本人だけが楽しむことを至上の価値とする人たちがいる。もう一つは、自分のコレクションを公開して、その文化的な価値を社会に普及することに使命感をもち実践する人たちであ

る。単なる愛玩のためのコレクターを私的コレクターとするならば、このタイプは公的コレクターということができる。

高梨氏は後者のタイプだといえる。しかし収集を始めた頃は、前者のタイプとして一定量のコレクションを形成することを目標としてきた。しかしその後土人形を集めるだけでは空しさを感じるようになった。その時期は、自宅のコレクションルームの展示ケースに人形が一杯になった時だという。自分が死んでも死後の世界に持参することはできないことを自覚する。目標を達成した後に、なにを目標にすればよいのかを見失うことになるが、それから土人形の文化を少しでも多くの人たちに知ってもらいたいという視野が開けた。コレクションの量を達成することを目的とした自己満足の段階から脱却して、土人形の文化の普及役を担うことを意識しそれを目標化することになる。つまりキャリアのうえで、「ひと皮むけた経験」をしたわけである。多くの人たちに鑑賞してもらうことで、土人形の文化を後世に継承することに自らの生きがいを感じるようになった。その辺りのことについて高梨氏は次のように語る。

人形は終わった文化なんです。人形をただ集めて眺めるだけでは空しいときもあるわけです。時代とともに生きていくようなねえ。(その時期は)飾り場が一杯になったときとか、死んでももっていけないからねえ。年齢にもよりますね。日本には、こんなすばらしい文化があるから。口はばつたいけど。人形なんていうのは、芸術品ではありませんから、でもそこには人間のもつ、そこはかたない良さがあるんですよね。だから50年も集めることを長く続ける人がいるんです。コレクションする人は自分の満足だけでは底が浅いような気がしますね。見せびらかすっていうのはないけど、誰かに見てもらいたい良いといってもらいたい気持ちが強いのではないですかね。

高梨氏の土人形に対する普遍的な気持ちや、コレクターとしての変遷から、現在の自分が置かれている立場や役割を自覚していることが分かる。

本展は、こうした高梨氏のキャリアにどのような影響を与えたのだろうか。「展覧会を実施してよかったこと」について質問したところ、高梨氏は次のよ

うに語っている。

街角ガイドの人たちと知り合えたことや、絵を描いている櫻田先生のお弟子さんと知り合えたことですね。絵を描く人との知り合いはいましたが。絵を見にいくので顔なじみがいますが、野田美術会。結構来てくれましたね。

(分野は異なるが、お互いを認め合う機会になりましたか?)

これからコラボレーションのようなこともできなくはないですね。

(自信のようなものはつきましたか?)

いくらかはあるでしょう。また、これまではできなかったが次に何かしらの次の企画ができるのではないという気はします。規模は小さいが、本当に小さいところでもまたこうした展覧会をやってみたいし、需要や要請があれば各地の公民館で話をしたいという希望がある。展示なども少しクラシックなところ、運河(地元の地名)の蔵を改造したところもよい。人形もよく栄えるなあ。

この質問の前に、展覧会をやり遂げたことへの達成感のような感じをもったかどうかを訊ねたが、明確な応答はなかった。むしろ、市民とのコミュニケーションにより共感し、知り合いができたことに喜びを感じたことが分かる。野田美術会というのは、市内の洋画会であるが、日展の参与をしていた画家櫻田精一氏が育てた会であり、毎年日展の入選者を輩出する全国的にもレベルの高いことで知られる。高梨氏はその会のメンバーたちと知り合い、お互いの特技を認め合う関係ができたことに喜びを感じている。それが新たな活動への意欲にもつながるようになったことが分かる。

(3) 学芸員の場合

次に、本展を担当した学芸員にとって、地域コミュニティにおける市民としてのキャリア形成はどのようなものであったのだろうか。

この学芸員は、2007年3月に大学院を修了し4月に着任した。指定管理者のNPO野田文化広場の会員として、在学中から2年間にわたり当法人の地域活

動や、博物館運営に関する準備を行ってきた。当初は都内に住んでいたが、勤務に先立ち同年2月に野田市内に転居した。

一般の大学生や大学院生にとって、地域コミュニティの一員としての意識やそれにとまなう活動はほとんどないといえる。まして地方出身者が都内で一人暮らしの生活する場合は、地域コミュニティとの関わりは無きに等しい。日常生活の拠点は、大学とアルバイト先の二重生活が主体となり、自分が住む地域のことはほとんどが無関心といってもよい。当館の学芸員もその辺りのことについては次のように述べている。

都会での学生の一人暮らしは近所の住民との付き合いが薄く、ただでさえ市民という自覚が生まれにくい。え、まずは大学というコミュニティに所属することになり、その結果、この8年間の間、市民意識はほとんど芽生えなかった。

地域博物館の学芸員を居住地別にみると大きく2つのタイプに分かれる。一つは、博物館が立地する地域コミュニティに住む、職住が同じ場合である。私自身のことでいえば、18年間に及ぶ学芸員生活の15年間はこのタイプであった。当初は職場だけにしか知り合いがいなかったが、仕事を通じて職場以外の地域の人たちとの知り合い関係が増えるようになった。中でも淡交会という親睦会は、キッコーマン株式会社の元社長を囲んで語りあう市民サロンのような会合であったが、その一員として仲間入りをさせてもらったことは象徴的な出来事であった。会合は元校長、会社経営者、キッコーマン重役、元新聞社論説委員、市議会議員など多士済々のメンバーからなり、自分の仕事や地域のことを話題に放談する場であった。若輩ながら私が仲間入りさせていただいたのは、地域に住み仕事に励んでいたことを人々が認めてくれたからに他ならない。その背景には、結婚して子どもが誕生したことで、子どものために地域の生活や教育環境を少しでも良くしたいという意欲があったことからである。私のキャリアの背景には地域コミュニティとその人たちとの親睦的な関係が強く影響していると思う。

それに比べて二番目のタイプは、地域コミュニティの外に住み、博物館に通

勤する場合である。隣接地の場合には、ある程度の共通理解があるだろうが、問題は遠距離地の場合である。この辺りの学芸員意識に関するデータは無いので憶測となるが、地域のことについては他人事のような意識になるのではないかと危惧する。たとえ本人が地域意識を持っていたとしても、地域の人たちが一員として認めてくれなければコミュニケーションは成立しにくくなる。その結果、次第に地域への意識が反れて、例えば自分の専門分野の研究に埋没するなどして、地域コミュニティから離れたところで学芸員のアイデンティティの確立を目指すことになる。あるいはサラリーマン化して、博物館は収入を得る場として割り切ってしまう志を持たず形骸化した学芸員に陥ることもあるだろう。しかし、それでは地域博物館の学芸員として、地域の課題解決に取り組むような仕事をすることはできない。

さて、この学芸員の場合、地域で仕事をし、また市民としても生活することにより、地域コミュニティに関する意識はどのように変化したのだろうか。特に本展によって、学芸員として自らのキャリア形成にどのような影響があったのだろうか。学芸員は次のように述べている。

(今回の企画展で出品者の高梨氏ばかりでなく、他の市民の人たちとの交流もあったと思いますが、野田市の市民としての意識形成が生まれましたか?)

土人形展に関わった最初の半年は、日々の業務の中で、毎日のように初対面の出会いがあった。土人形展に直接関連した部分では、特に展示オープン後、当番で展示室内に出ているときに、市民と直接対話・交流が出来るひとときであった。会期が夏休みにかかっていたこともあってか、土人形展には市内在住の小学生や家族連れなどがよく訪れた。私は子どもや子連れの家族と、これまで人間関係をはぐくむ機会がほとんどなかったこともあってか、子どもとのコミュニケーションが得意ではないが、お客さんとして来た人を避けるわけにもいかない。展示解説に立つことは、ほかにも地域の高齢者、主婦、高校生など、自分がこれまで関わりを持ってこなかったあらゆるコミュニティの人々と接する機会を自然に作り出すことになった。これら市民の輪の中に自分が入ることによって、自ずから自分が

野田という地域の一員であること、またこの博物館が地域住民（市民）にとっての場所であり、自分はそこの学芸員として果たすべき務めがあるのだということを自覚させられた。

このように、様々な市民とのコミュニケーションを通じて、それまで未経験であった地域コミュニティについて身体的に感じとり、それを理解することができたことである。また来館者とのコミュニケーションを通じて自らが地域の一員であることを自覚している。さらには、そうした経験の中から地域における博物館の役割についても考えようとしている。次の語りの中からも、それを知ることができる。

学芸員として展示解説に立つと来館者との対話が必ず発生する。対話は展示物・野田の醤油醸造の歴史などに関することだけではない。例えば、博物館の近くに食事を出来る場所が少ないよね、という問題提起を受ける。宿題を持った親子連れの来館には、課題を聞き、一緒になって宿題をやることもある。土人形展では、「高梨さんと近所なんです」と言ってやってきた来館者もあった。それぞれのコミュニティならではの、博物館に対する要望があり、また会話の流れとでも呼べるものがある。多くの来館者と接する中で私が感じたことは、学芸員だから、学術的な質問にだけ明快に解答していればよいというものでもなく、寧ろこうした日常会話から野田についての様々な話題に発展させていくことが交流促進には大切だということである。相手が話したいことから会話を始めることが大事である。また、多くの来館者が、話をするにやぶさかではない（むしろ積極的に受付係の者と話そうとする）ことが分かり、これは私にとっては驚きでもあった。

野田市民である自分は、日常会話から始めるこのやり方に馴染みやすかったと思う。カフェ等の要望、宿題対策、野田における日常的な話題は今の私自身の生活にも関わりがある問題であり、共感しやすいものであったからである。共感する自分を客観的に感じることで、私は、自分が野田市民の一員なのだと自覚させられた。

個人的に、博物館の学芸員は、イメージ的にはまちの商店の店主、あるいは郵便屋さんや、おまわりさんのように、市民と顔見知りになり、挨拶を交わすような関係になるのがよいのかもしれない。まちのことをよく知り、市民の日常的な要望について博物館を拠点に解決出来るような仕事人となることも、学芸員の務めの一つであろうと、今回の土人形展の来館者との対話の経験を通して感じたのである。

また、学芸員の新規採用者は、地域の歴史や文化などの基礎的な知識が不足していることが否めない。その部分については、私の場合にも同じであったように、実務経験を通じて習得していくことになる。その場合にも、市民とのコミュニケーションにより、市民から情報を得ることが不可欠ともなってくる。本展を担当した学芸員にとってもそうした経験はプラスの効果になったことを認めている。その辺りのことを次のように述べている。

新人の学芸員で、郷土人形についても、野田の歴史や文化についても、半端な知識しか持ち合わせていなかったこの時期の私は、高梨氏の話すことを横で聞きながら、会期中、徐々に、解説に使える文言を頭に入れていくよりほかなかった。野田のことについても、来館者の方から教えられることも多い状況であった。しかし野田に住んで、野田のことをよく知らないというのも奇妙なことであり、ましてや郷土の歴史を守り伝える地域博物館の学芸員としてネームタグをさげているのであるから、野田の文化をオーソリティをもって話さなければと決意させられた。これについて自分
に自信が持てるようになるには、なお時間がかかるであろう。

私は来館者に対しては、リラックスしてもらうために、「どこからお越しになりましたか」と会話の途中ではさむことが多いのだが、その中で、自分は野田在住であることを言う。その時にやはりどの来館者でも、野田に暮らす人が相手なんだと少し心を開いてくれる雰囲気があり、ほのかに嬉
しい感じがある。

来館者とのコミュニケーションについても、ここに大切な指摘がある。学芸

員自身が同じ地域に住んでいることを明かすことで、市内在住の来館者が気持ちを許すことに気がついていいることである。

なお、当学芸員にとっては、本展に関わる一連の作業の中で高梨氏との共同作業の中から、学芸員という職業上のキャリア形成にとっても次のようなプラスの効果があった。一つ目は、企画展を完成させるために出品者と調整する能力である。当初は事前に準備した企画案とのすり合わせ作業に戸惑いを生じた。単なるコレクション展ではなく、高梨氏のキャリアをコレクションから描こうとする意図について、高梨氏との意見の食い違いがあったからである。しかし、自らの努力によりその部分をうまく調整することができた。二つ目は、それと関連することだが、「これは自分にとっては苦手な分野ですが…。十分とはいえませんが、高梨氏と触れ合うことで、新聞の取材に対して、長い年月たゆまず一つの対象物（郷土人形）の収集活動を続けておられることが尊敬できる旨を話したように記憶しています」というように、自分と違う価値観をもつ人に対する尊敬の気持ちを持つようになったことである。三つ目は、本展の実施は高梨氏の全面的な協力や支援、また同僚の学芸員などのスタッフの協力により成り立つことを学ぶことができたことである。「展示は自分一人の力では絶対に作れないものであることを知り、現場に担当者として置かれてはじめてそれを自然に受け入れることが出来た」と述べている。

4. 結論

これまでのキャリアに関する調査研究は、その多くが職業キャリアに関するものである。本稿は、「市民のキャリアデザインの拠点づくり」をビジョンにかかげる野田市郷土博物館が実施した企画展を題材として、それが市民のキャリア形成にどのような影響を与えたのかについて検証を試みた。ここでいう市民とは、先述したように、来館者、出品者であるコレクター、学芸員のように、地域コミュニティで生活したり仕事をする人たちのことをさす。

その結果は、企画展の展示内容ばかりでなく、その準備の過程や展示室でのコミュニケーションを通じて、それぞれの市民のキャリア形成にとってプラスになったことを確認することができた。そこには市民相互のコミュニケーションの作用と、そこで得られた成果を応用し、自分化していく過程が含まれる。

なお、ここでいうコミュニケーションとは、人間同士が言葉、表情などを通じて、ある情報を送受信する関係であるが、それは単なる情報の送受信の関係にとどまらず、情動的な共感性をともなうものとする。またその情報とは、知識、感情、意思などをさす。博物館の場合には、伝達手段としては、展示、映像、講演などがあるだろうし、学芸員やコレクターによる展示解説なども含まれる。大切なことは、機械的な情報の送受信というのではなく、相互理解や共感性や他者理解を含むことがコミュニケーションの成立要件である。自分化とは、コミュニケーションで得られた成果や結果をもとにして、自分のこれまでのキャリアと照合させることで、その不足分や弱点を補うことや、さらなるキャリアの発展のために活用していくことを意味する。

キャリアのトランジション理論⁽¹⁰⁾には複数の見解が示されている。中でもN.ニコルソンの示すトランジション・サイクルモデルは、(1) 新しい世界に入る準備の段階 (preparation)、(2) 実際にその世界に初めて入って、いろいろ新たなことに遭遇する段階 (preparation)、(3) 新しい世界に徐々に溶け込む段階 (encounter)、(4) もうこの世界は新しいとはいえないほど慣れて、落ち着いていく安定化段階から成り立つ (stabilization) の各段階を経過する。すなわち「準備→遭遇→順応→安定化」に移行する。キャリアはそのような連続性をもち、次のサイクルに移行しながらキャリアを発達させていくことになるという⁽¹¹⁾。

図3は、来館者・コレクター・学芸員の相互間におけるコミュニケーションの相関的な関係性を示す。実線で示した矢印は、キャリア形成にとってプラスの影響が認められたことを意味する。点線はそれが顕著には認められなかったものである。

来館者は、土人形を見たことに楽しさや感動した人たちが多かったが、少数ながらも一定数の人たちがコレクターの生き方に共感を示した。そのなかでも職業をもつ現役の中高年者に、コレクターの生き方が受容されたといえる。

それに比べて、コレクターは来館者と知り合えたことに喜びをもっている。特に絵画関係者と知り合えたことにより、今後共同展をやりたいと意欲をみせる。また本展で来館者から好評を得たことに手ごたえを感じて、今後は積極的に土人形の文化の普及役として講演活動などにも取り組みたい姿勢を示すよう

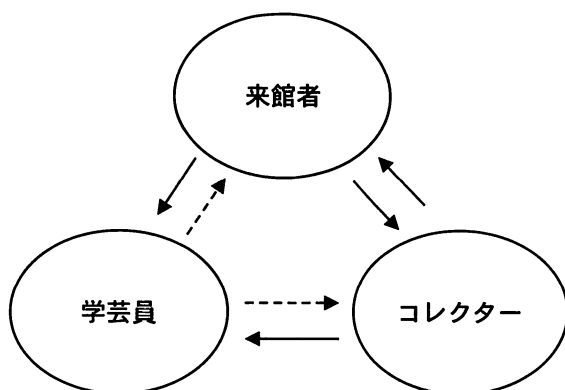


図3 市民コレクション展における市民間のコミュニケーション相関図

になった。つまり、来館者とのコミュニケーションによって得られた成果をもとに自らのキャリアに対して新たな目標を設定するようになったといえる。ニコルソンの理論は、職業キャリアを対象にしているが、同じようなサイクルは市民のキャリア形成についても適用できるかもしれない。そのトランジション・サイクルモデルに従えば、安定期（stabilization）から次の段階に向けての準備期（preparation）に入るうえでの契機になったとも考えられる。

前二者に比べて、学芸員の場合は、図3で示すように来館者からキャリア形成にとってプラスの影響を受けた。この学芸員にとっては、着任する以前の大学院生の時からの準備作業は、トランジション・サイクル・モデルの上からいえば準備期（preparation）であった。その段階では地域コミュニティとしての一員という市民意識は皆無であった。着任して最初に担当した仕事为本展の企画と実施であったが、モデルの中では遭遇期（encounter）にあたる。来館者やコレクターとのコミュニケーションによって市民としての自覚ができたことは大きな成果であったといえる。職場と住まいが同じ地域であることから、市内在住の来館者から地域の仲間として見られることに安堵感をもち、日常的话题にも関心や共感をもち、地域コミュニティの一員としての自覚を自然にもつようになるとともに、地域博物館の役割についても考えようとするようになった。そのことは地域博物館の学芸員として働く上でも基本的な意識として重要である。

また、学芸員の職業キャリアの形成という観点からみると、高梨氏と共同作業をすることにより、仕事上の調整力、共同作業の特性を把握し、仕事上の相手に対する尊敬心を養うことにもなった。遭遇期では仕事の技能は未熟であるが、それは経験に従い習得していくことになる。さらに、ここでは知識や技術とは別の意味での学芸員に不可欠となるコンピテンシーとしての能力を養うことができたといえる。

5. 課題

今後の検討課題として次のことを掲げて本稿の締めくくりとしたい。

一つ目は、本展は、来館者に対する展示活動が中心となり、博物館から来館者に向けた一方的な情報伝達が中心的であった。そのため、来館者に対するキャリアへの影響や効果が不十分であったかもしれない。今後は、展覧会を「導入部」と位置づけて、そこで興味関心を示した来館者を対象にして、ワークショップのような市民講座を企画して、より集中的にキャリアについて学習する機会を設定することを検討する。

二つ目は、今回のようにキャリアからアプローチした企画展に対して、一部の中高年の有職者がコレクターの生き方に肯定的な反応を示したことがあげられる。しかし来館者個人の生き方にどのようなプラスの影響を与えたかを具体的に調べるができなかった。この点については、今後の追跡調査が必要となる。またキャリア展示を考える上で、来館者の年齢や職業に応じて、その情報の受容のされ方に傾向性があるかもしれないことも検討課題としたい。

三つ目は、学芸員が地域コミュニティを理解して、その一員になったという意識をもったことが判明したことは、学芸員の職業キャリアを考える上でも興味深い成果であった。他の学芸員でも同じことが言えるのか、また博物館が立地する地域以外に住む学芸員では果たしてどうなのかについても、今後の検討課題としておきたい。

四つ目は、今回のように仕事場と住まいが同一地域コミュニティに所属する学芸員の場合には、市民としてのキャリア形成と職業キャリアの形成との相関的な関係性についても検討していきたい。

五つ目は、市民のキャリアデザインとは、地域コミュニティで生活したり仕

事をする市民ひとりひとりが、他者に依存することなく自分らしく生きていくために必要な知識・知恵を身につけて実行していくことだと考えている。今回はじめて具体的な事例から市民のキャリア形成のあり方を検討したが、今後とも野田市郷土博物館の事例に基づきその実態を明らかにしていきたい。

最後は、ニコルソンの示す職業キャリアのトランジション・サイクル・モデルが市民のキャリア形成についても適用することができるのかどうかについては、今後とも考慮しながら検討課題としていきたい。

[注]

- (1) 金山喜昭2007「まちづくりと市民のキャリアデザイン (2) ～NPO法人野田文化広場が野田市郷土博物館を運営する基本的な考え方～」法政大学キャリアデザイン学部紀要第4号、p191－204
- (2) <http://www2.city.ritto.shiga.jp/hakubutukan/>
- (3) 熊崎康文2000「岐阜県博物館マイミュージアムギャラリーについて」岐阜県博物館調査研究報告第21号、p25－32
- (4) <http://www.city.kushiro.hokkaido.jp/icity/>
- (5) 金山喜昭1999「現代社会の批評機能をもつ博物館活動の試みー野田市郷土博物館の「私のコレクション」展」博物館学雑誌第25巻第1号、p63－70
- (6) 中川志郎2001「『博物館ビックバン』の認識が21世紀型博物館の命運を決める」カルチベイトNo.13、p10－11
- (7) <http://www.nat.pref.ibaraki.jp/>
- (8) 朝日新聞群馬版1998年2月5日
- (9) 丸山昭彦1998「市民のコレクションと博物館」月刊ミュゼVOL.32、p25
- (10) Bridges, William (1980) Transition: Making Sense of Life's Changes. Reading, M A: Addition-Wesley. (倉光修・小林哲郎訳『トランジション』創元社、1994
Levinson, Daniel, J. (1979) The Seasons of a Man's Life, New York, NY: Ballantine Books (南博訳『ライフサイクルの心理学 (上) (下)』講談社学術文庫、1992
Erikson, E.H. and Erikson, J.M (1997) The Life Cycle Completed : A Review. New York ; NY : W.W Norton &Company. (村瀬孝雄・近藤邦

夫訳『ライフサイクル、その完結』みすず書房、2001

- (11) 金井壽宏2003『キャリア・デザイン・ガイド』白桃書房、p79-84